児童の積極的授業参加に関する研究(23)

—学級内での社会的地位の影響に対する縦断的検討—

○安藤史高¹・小平英志²・布施光代³

(¹岐阜聖徳学園大学教育学部・²日本福祉大学子ども発達学部・³明星大学教育学部)

キーワード：積極的授業参加行動、ソシオメトリック・テスト、縦断的検討

Positive class participation by elementary school pupils (23) : Longitudinal study of effects of sociometric status

Fumitaka ANDO¹, Hideshi KODAIRA² and Mitsuyo FUSE³

(¹Faculty of Education, Gifu Shotoku Gakuen Univ., ² Faculty of Child Development, Nihon Fukushi Univ., ³Faculty of Education, Meisei Univ)

Key Words: class participation, sociometric test, longitudinal study

目 的

児童の積極的授業参加行動を検討してきたこれまでの研究から、積極的授業参加行動とは「注視・傾聴」、「挙手・発言」、「準備・宿題」の3つにまとめられること、授業に対する動機づけと最も関連が強いのは「注視・傾聴」であることが明らかとなった(布施ら, 2006)。

しかし、積極的授業参加行動の生起に関わる要因としては、動機づけ的要因以外にも様々なものが考えられる。安藤ら(2014)では、ソシオメトリック・テストを用いて、児童の学級内での社会的地位と積極的授業参加行動の関連を検討し、社会的地位が高いほど積極的授業参加行動を行う傾向にあることが示された。本研究では、縦断的な調査データを用いて、学級内での対人関係と積極的授業参加行動との関連について検討を行う。

方 法

調査対象者：中部地方および関東地方の公立小学校の児童で、2回の調査のいずれにおいても回答を行った274名(男児130名、女児144名)。学年は、1回目調査時(T1)は3～5年生で、2回目調査時(T2)には4～6年生であった。

調査内容：(1)積極的授業参加行動(23項目、4件法) 安藤ら(2009)の授業に対する積極的授業参加行動を尋ねる質問項目から項目を整理し、23項目とした。「注視・傾聴」「挙手・発言」「準備・宿題」の3下位尺度から構成された。(2)ソシオメトリック・テスト 学級の中の人間関係を測定するため、「勉強を教えてもらいたい人(学習場面)」および「休み時間に一緒に遊びたい人(遊び場面)」を学級内からそれぞれ3名まで挙げさせた。

調査では、他に自己意識尺度・動機づけ尺度も併せて実施したが、本研究では分析の対象としない。

手続き：クラス毎に担任教師が調査用紙を配布し、一斉に回答を求めた。

調査時期：T1は2013年12月～2014年1月、T2は2014年12月に実施。

結果と考察

積極的授業参加行動尺度は先行研究に従って下位尺度を構成し、項目得点平均を下位尺度得点とした。 α 係数は、「注視・傾聴」が(T1: .87, T2: .89)「挙手・発言」が(T1: .74, T2: .78)「準備・宿題」が(T1: .67, T2: .78)であった。ソシオメトリック・テストについては、場面ごとに、ある子どもの名前を書いている子どもが同じ学級に何名いるかという被選択数を算出した。その上で、学級ごとに回答人数が異なるため、被選択数を(学級の回答者数-1)で除し、被選択率を算出した。

そして、(1)ソシオメトリック・テストでの被選択率が積極的授業参加行動を予測する、(2)1回目の調査での得点が2回目の調査での得点を予測する、(3)学年(T1)の効果を統制する、という仮定の下にモデルを構築し、IBM SPSS Amos22を用いたパス解析を実施した(Fig. 1)。

その結果、T1では、学習場面での被選択率からは積極的授業参加行動に対して有意なパスが見られたが、遊び場面での被選択率からのパスは有意ではなかった。一方、T2の時点では、学習場面の被選択率から挙手・発言に対してのみ有意な正のパスが見られた。挙手・発言のように他の児童から観察されやすい行動は、その時、その場面での社会的地位によって影響されることが示されたといえる。

また、安藤ら(2014)では、遊び場面の被選択率によって積極的授業参加行動得点に差が見られていたが、遊び場面と学習場面の間に共分散を仮定したパス解析の結果、授業内での行動には、学習場面での社会的地位のみが影響していることが示された。場面によって児童の社会的地位は異なり、それぞれ影響を与える行動が異なることが示唆される。

引用文献

安藤史高・小平英志・布施光代(2014). 児童の積極的授業参加に関する研究(19) —教師に対する面接調査による検討— 日本心理学会第78回大会発表論文集, 1166.

安藤史高・布施光代・小平英志(2009). 児童の積極的授業参加に関する研究(6) —積極的授業参加行動と達成目標・コンピテンスとの関連について— 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 565.

布施光代・小平英志・安藤史高(2006). 児童の積極的授業参加行動の検討—動機づけとの関連及び学年・性による差異— 教育心理学研究, 54, 534-545.

※本研究はJSPS科研費【課題番号24530838】の助成を受けた。

Fig. 1 パス解析の結果
— 1199 —

※統制変数である学年(T1)と
そこからのパスは省略した